

平成24年度 石山プロジェクト春学期 報告会

10月18日（木）第1講義室において、春学期の間、石山幼稚園、石山小学校でスクールサポーターを続けてきた学生たちによる報告会が行われ、自らの成果と課題を交流しました。

当日は、学生22名、石山幼稚園教員1名、助言者（退職女性校長会から派遣）2名、大学教員2名、計27名が参加しました。以下に、報告内容の概略を記します。

幼稚園グループ



「一緒に遊ぼう！」と寄ってきた子を、遊び仲間に入れなかった子に対して、先生は落ち着いた声で「なぜ、だめなのかなあ？」と理由を尋ね、「そういうことなのね。」と認めた後、「だけど、『ダメ！』って言われた人は悲しいよね。『今度は一緒に遊ぼうね！』と言えたら素敵だね。」と、言葉かけしておられました。その子の主張を大切にしながら、相手の気持ちに気づかせる細やかな支援が、思いやりや社会性を育てることにつながるのだと思いました。



運動会に向けて、4歳児は、直線コースの「かけっこ」に取り組みました。ゴールまで元気よく走りきる姿からは、「運動が楽しい。」「友だちと一緒に運動したい。」という思いが伝わってきました。一方、5歳児は、「学級対抗リレー」で、「気持ちを一つにして走る」という目標のもと、走る順番や勝つための作戦を相談したり、走っている仲間を応援したりできました。集団の一員としての意識や、協同性が育つ段階にあると感じました。「走る」こと一つをとっても、発達に応じた場の設定を周到に行っておられるのだとわかりました。



1・2年生グループ

運動会での全校準備体操に向けて、4列縦隊から体操の隊形へと移動する練習がありました。まず「基準列！体操の隊形に開け！」という号令で、基準となる縦横各一列の子どもたちが移動し、次の「全体、体操の隊形に開け！」の号令で、その他大勢の子が移動するのですが、1年生は、段階的に隊形を変化させることに戸惑うらしく、基準列以外の子どもたちまで、一つ目の号令で移動してしまうことが多くありました。一方、2年生では、誤って移動しかける子は若干いますが、周りの子に注意されると、次



からは間違えないようになりました。他の子に教えてあげたり、周りの様子を見ながら動いたりできる2年生の様子から、小学校での1年の成長は大きいことを再確認しました。今の1年生も、来年には上手に動けるようになっているだろうと思います。

低学年児童は、中・高学年に比べて、大人からの影響を受けやすいと思われれます。スクールサポーターも、大人として、自身の言動がもつ影響力を自覚しながら接していくことが一層重要であると考えます。さらには、「この時間にどんな力をつけたいか。」「子どもが何を求めているのか。」等、先生の願いを意識しながら関わっていくことが大切だと思います。もちろん、これは、日頃から一人ひとりを丁寧に見取らなくては実現し難いことだと思います。



3年生グループ



授業時間中に誰かが発言する時、先生は「話してもらっていいですか？」と全体に声をかけ、聞く態度を意識させておられました。また、帰りの会では、その日、すばらしい行いをした子をみんなの前でほめておられました。このように、互いを尊重し合う取り組みが、子どもたちの人権意識を高め、学級集団のまとまりを生むのだと思いました。



側にサポーターがいれば学習しますが、側を離れると何も手につかない子どもがいて、その子からは、「いつも自分を見てほしい。」という強い願いを感じました。先生は全体の学習を進めなければならず、特定の子だけに関わってはられません。今後も、個々の様子に目を配りながら、授業に参加しにくい子をフォローできるよう努力していきたいと思います。

担任の先生が産休～育休に入られたことで、子どもたちの様子が変わっていくのを、興味深く見ていました。新しい先生に替わった当初は、今までとは異なる指導方法に不満を口にする場面もありましたが、日が過ぎるに従いそれが徐々に減っていき、先生の方法に馴染んでいくようでした。また、引っ込み思案だった子が、授業中に積極的に発言するようになる等、違った一面を見せる子も出てきました。あらためて、担任の影響は大きいということに気づきました。

4年生グループ

問題行動を起こした子に指導する際、先生は、“あなたの成長や幸福を願っている。”という思いを、真正面から伝えておられました。その子は、面倒くさそうな表情をしていましたが、自分と真剣に向き合ってくれる先生の姿から何かを感じたはずで、「煙たがられたくない…」という姿勢では、心は伝わらないと思いました。



休み時間に、ある子が「遊ぼう。」と寄ってきたので、「何をして遊ぶ？」と返すと、「何でもいい。」とつぶやきました。「好きな遊びは？」と尋ねると、「考えるのが面倒くさい。」とか、「学校はつまらない。」と応えました。でも、サポーターを独り占めしたいという思いは人一倍強く、抱きついて離れないこともありました。子どもにより、抱える不安や悩みは様々です。“寄り添う”という言葉をよく使いますが、一人ひとりの様子をよく観察し、分析し、共感することで、それが可能になるのだと思います。

体育の時間に、走り幅跳びが苦手だからと言って活動しない子がいました。そこで、砂場の端で、立ち幅跳び、短い助走での片足踏切の練習を繰り返させながら、“努力を認め、褒める”ようにしたら、授業後半では、長い助走の片足踏切ができるようになりました。「できない。」「おもしろくない。」と、初めから投げ出す子については、その子にあった課題を提示し、地道につきあえば、できることも増えると思いました。

些細なことで、関係が悪くなった二人の女子の、それぞれの話を聞き、仲直りさせることができました。サポーターは、子どもたちが話しかけてくるのを待つばかりでなく、変化に気づいたら、こちらから声をかけることも大切だと考えます。これからも、子どもの気持ちに敏感な存在でありたいです。

5年生グループ

授業中や休み時間中に、困っている子がいたら、先生方は積極的に声かけされていました。「どうすればよいと思う？」「こうすればよいよ。」等の働きかけからは、一方的な説諭で終わらせない教師の「やさしさ」を感じました。高学年児童に対しては、なるべく多くのことを子どもたちに任せ、教師は、助言したり、補助したりしながらつきあうのが理想だと思います。そのことで、子どもたちの活動意欲は高まり、主体性も身につくのではないかと考えます。



家庭科では、ミシンが上手く動かさず、多くの子が一斉に「助けて！」と言いました。そのような時、サポーターはどのように個々のニーズに対応してよいのが難しいと感じました。

校内ウオークラリーでは、低学年の子が、困っていたり、危ないことをしたりしていたら声をかけて、自分たちで解決する姿が見られました。高学年としての立場を自覚できるよい場だと思いました。

6年生グループ

学力面で課題を持つ子、集団に入りづらい子等は、総じて大人しいようでした。彼らが仲間と楽しく生活できるように、サポーターが、子ども同士の交流の場を設けられたらよいと思いました。また、そのような子等との関わり方についての指導を、低学年段階から積み上げておくことも大切なのではないかと考えました。



教育実習中に見た中学校での授業と比べると、小学校のそれは、視覚に訴える教材・教具が多いことや、教師の言葉遣いが柔らかいこと、黒板で説明をしている時間が短いこと等で、優れていると思いました。また、学習機の右端に「挙手カード」を設置し、自分の挙手した記録を書き込むことで、自己評価しやすくしたり、学年の先生同士で、一つの教材・教具を共有し、効率のよい学習準備をしたりする等、先生方の工夫も発見できました。小学校の授業のよい点を、中学校の授業にも取り入れていくべきだと考えました。

たてわり班での活動は、1年生の立場に立って考えることを意識させておられました。また、「6年生が、ルールが守れないのはどうして？」のように、自分の立場を考えさせる声かけがよく聞かれました。どの学年においても、発達や集団内での役割に応じた指導をしていく大切さを感じました。

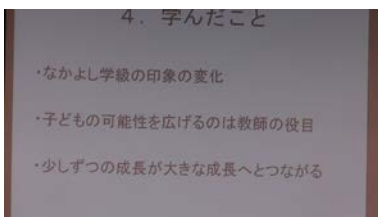
なかよし学級グループ

特別支援教育について専門的に勉強していなかったため、活動当初は不安を抱いていましたが、先生方から「一緒に過ごすうちに、接し方がわかってきます。」と言ってもらい、気持ちが楽になりました。そして、その言葉通り、活動を重ねるほど、一人ひとりの特性と接し方がわかっていきました。子どもは子どもであり、特別に意識しすぎてはいけないと思いました。



先生方の言葉が豊かだと感じました。例えば、学習意欲を失っている時には、「これはおもしろいよ。」と誘い、何かができる時には、「すごいね！」と、大げさにほめ、子どもの可能性を広げておられました。

子どもの「できない」気持ちを受けとめること、できるようになるまで繰り返し支援すること、子どもたち同士の関わりが深まる声かけをすること、教師も楽しむ姿勢を持つことが、“子どもの笑顔”につながるのではないかと今は考えています。



学生報告の後、滋賀県退職女性校長会（滋賀県梅の実会）の先生方と大学教員から指導助言をいただき、春学期の報告会は終了しました。

スクールサポーターの皆さん、ご苦労様でした。

お忙しい中ご参会頂きました先生方、ありがとうございました。

